

巻頭言

今年度は4名が修士論文を仕上げました。これまでで最多です。いずれも良い修論に仕上がりを、原著論文にもなりました。うち2名は中国からの留学生です。

国際学会には、北京でのCOIL-8(5月)に学生2名(角谷・樊)と参加し、講演および座長を行いました。5時間遅れのフライトで始まった渡航で、外国人は電子マネーが使えず不便でしたが、有意義な滞在でした。会場のFriendship Hotelは壮大で、講演会場も大きく、目を見張るものでした。卒業生のランさん、舟浴君、および内外の研究者とも会えました。中国科学院の見学ツアーも組まれており、イオン液体研究センター等を見る機会を得ました。研究が応用志向で戦略的、かつ大掛かりで、イオン液体のプラント利用も進んでいるようでした。他国の研究状況を見る機会は普段無いため、日本の状況を認識する良い機会となりました。今回、日本人参加者はごく少数でしたが、私を含め多くが危機意識を持っているようでした。連日、今後の研究動向に関する意見交換がなされたのも印象的でした。

国内学会には、高松で行われた有機結晶シンポジウム(11月)に10年ぶりくらいに参加しました(光異性化の研究発表、中村)。旧知あるいは同じ科研費領域の研究者が多く、全く違和感はありませんでした。学会以外には、幕張メッセで行われた分析機器展(9月)に15年ぶりに参加して情報収集しました。

4月に、ある財団関係者の来訪があり、この1年の研究状況を丁寧に説明しました。私達は液体の光反応で固体を生成する方法など、特筆すべき種々の新現象を見つけてきました。しかしながら後日、「研究の進捗が認められない」というメールが送られてきました。さらに後日、別の関係者が直接訪ねて来られ、報告書に「数値目標とその達成度」を全項目に入れるようクレームが付き、修正を再三要求されました。これは工学分野なら、評価基準として正しいのかもしれないと思いあたりましたが、我々の研究は理学的研究です。これらは「開拓的研究」であって「改良型研究」ではないということを、当初から関係者にも、重ねて説明してありました。新原理の実証が目的なのだから、数値(効率・収率が何%改善されたか)で評価する理由がありませんが、ここに至って、先方は全く理解されませんでした。このような考え方は、この電機メーカーで開発に従事していた方々が最後に財団に下り、同じ流儀で基礎研究を評価しようとするのが原因とすると、やむをえないことにも思いました。状況は若干違いますが、ある著名な先生が、似たような体験談を、学会誌に冷静な筆致で書かれていたのを思い出しました。

研究室の状況としては、動的粘弾性とイオン伝導度の測定系が立ち上がり、関連研究が相当進みました。先端膜工学研究センターが開所し、その一員となったため、関連行事にも参加しました。阪大のレーザー研究所をTHz分光のため訪問しました。東レリサーチセンターに超高速熱分析を委託しました。私の状況としては、9月下旬から11月頭までは申請書作成で苦労しました。10月からは就職委員となりました。12月には、市立山口東理大で2日間の集中講義を行いました。60名以上の聴講者がいましたが、みな熱心な印象で、講義は円滑に進みました。井口先生に学内の施設等を丁寧に案内いただき、公立化を機に活気づいている様子が伺えました。終了後、卒業生の舟浴君に宇部の工業地帯を案内してもらったのも楽しい経験でした。

社会状況としては、1月には中国で発生したCOVID-2019が拡大し、武漢封鎖等がなされました。2月には横浜のクルーズ船で感染が生じ、3月には日本でも全国の小中高が一斉休校となりました。日本化学会春季年会も開催中止となり、本学の就職イベント等も中止になりました。

(2020年3月 持田)